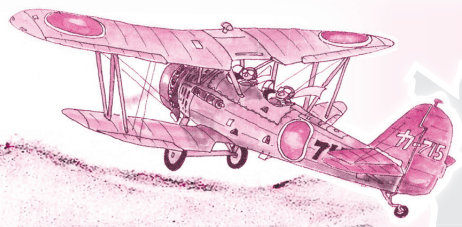
予科練 平和記念館だより



予科練平和記念館整備推進室では、予科練や海軍に関する資料や写真を集めています。ご存じの人はぜひご一報ください。

師走・今年も残り1か月――などの言葉を聞くたびに、この1年があっという間に過ぎてしまったように思えて、「何かしなければ」と妙にあせった気持ちにもなります。皆さんはいかがお過ごしでしょうか。

今月は、現在も残っている予科練の建物を紹介します。

●予科練生の病院――医務科

昭和15（1940）年に予科練生（海軍飛行予科練習生：少年飛行兵のこと）の教育を担当する基地として町に開かれた土浦海軍航空隊（土空）は、昭和20（1945）年6月10日にアメリカ軍のB29による爆撃を受けて大きく破壊されました。しかし、現在陸上自衛隊武器学校となっているこの敷地内には、戦火をくぐり抜けた土空時代の建物がまだ残っています。そのなかの一つ、医務科は土空隊内の病院だった建物です。木造平屋建てで、予科練生の増加にともない増築された複数の病棟が一つの廊下でつながっており、診察室や病室のほかに手術室や薬剤室、レントゲン室などを備えていました。

予科練生は病気や怪我をすると軍医の診察を受け、症状によって軽業（けいぎょう）・休業・入室となりました。軽い病気や怪我などは『軽業』で、座学は出席しますが体育など身体を動かす授業を休む事が許されます。寝込むような病気などは『休業』といって1日寝ていることができました。いずれも『軽業』『休業』と書いた札を首に下げたりハンモックにつけたりしました。また、重い病気になったり怪我をしたりすると『入室』＝入院となり、それ以上は海軍の病院へ搬送されました。

昭和20年3月には、それまで軍医と衛生兵という男ばかりの医務科に初めて18人の女性看護婦が着任しました。彼女たちは村松晴嵐荘（せいらんそう）付属看護婦養成所（東海村）を出たばかり、10代後半から20代前半の若さでした。学徒動員や女子挺身隊（ていしんたい）などで学生や女性も戦力と考えられた時代ですが、まだ若い女性が働くことには抵抗もあり「軍隊に女が入った」と言われながら、白衣をズボンのように縫い直したつなぎを着て懸命に立ち働いたそうです。本来ならばインドネシア・セレベス（スラウェシ）島マカッサルにある研究所に配属になるはずでしたが、戦局の悪化で衛生兵が人手不足となり引き抜かれたのでした。

▲医務科外観

▲内部の様子

前述したように、土空は空襲により壊滅的な被害を受けましたが、医務科も例外ではなく、最初の攻撃の負傷者が運び込まれ処置を待っていたところ、攻撃の第2波で病棟1棟が吹き飛びました。入室していた予科練生にはあらかじめ避難命令が出たそうですが、その被害のほどは定かではありません。

医務科の建物自体は戦後も残り、土空が武器学校となってからは広報資料館として使用されていました。現在は外観のみ見ることができますが、横板を張った壁や窓の辺りなど、予科練の時代を今に伝える貴重な木造建築です。

●

この時期、冷たく乾いた風に吹かれながら楚々（そそ）として冬桜が咲いているのを見かけることがあります。春咲き桜の代表種『ソメイヨシノ』が一斉に咲き誇ってすっと散りゆくのに対し、こちらは徐々に花開き1か月ほど咲き続けるそうです。また冬に咲ききれなかったものは春に咲いてしまうという2度咲きの頑張り屋で、寿命もソメイヨシノの50年に対し2～300年といわれています。彼らを見習い「冬がだめでも春に咲く」という気持ちをもって、寒風に負けず頑張りたいものです。